

し、以の外御立腹被遊たり。此趣金澤へ聞え、本多安房以下、未だ小松より兎角被仰出無之といへども恐縮し、右廻り番の者共吟味致す處、十兵衛若黨の手付の段明白に付、十兵衛へ預け置處、若黨遂に自害し相果てたり。此旨小松へ相聞え、尙以御立腹被遊、一盃吞んで指し申すとの御説にて、平三郎に切腹被仰付。但表立金澤へ何とも被仰出無之。急速江戸へ各會議、小松之御様躰最初に及言上。如何様共微妙公御腹のなほらせられ候やうに可申付旨、御返事到來す。安房等群議仕、其夜廻り番の小姓中不殘方々へ預け、其後いかやう共御意次第の由、小松へ伺候處、其夜の番頭不作法に思召候。十兵衛儀も若黨自殺爲仕候段、是以不縮之由被仰出。日夏市郎右衛門は篠原織部預り、氏家十兵衛は福嶋彌右衛門預り在之處、兩人共切腹可申付旨、從金澤言上之。尤に思召由御説にて、則市郎右衛門方へは平三郎せがれに大橋又兵衛を被指添、檢使に被遣、市郎右衛門にせがれ兩人切腹す。氏家十兵衛もせがれ一人有之、同事に切腹す云々。とあり。又關屋政春の古兵談にも、利常卿小松へ御隠居、小松附の衆いまだ過半金澤に居たる

時分、七月十六日廻り番日夏市郎右衛門・氏家十兵衛・齋藤市左衛門・富永甚十郎・川勝李之助・大橋五郎右衛門・中村瀨兵衛足輕十人許先に立ち、金澤大豆田邊を夜の六つ半時分に廻る折節、淨住寺の前にて躍あり。足輕是を追ひ拂ふ。何者やらん侍一人、若黨・草履取をつれ、足輕と問答して居たり。跡より右七人の者共來る處、彼侍刀に手を懸け抜かんとす。氏家十兵衛子飼立の若黨廿歳許りなるが、刀を抜放して侍の眉間を切る。侍も抜く處を抱き捕へて見れば、小松附馬廻金森平三郎と云ふ者也。小松者をあなづりて如此と、利常卿大方ならず御立腹にて、番頭と云ひ年寄と云ひ、第一日夏市郎右衛門不屈とて、篠原織部へ預けられ、又うつけたる家禮を召仕ふとて、氏家十兵衛をば福嶋彌右衛門に預けられ、其外五人は閉門也。其後色々御説言ありけれども、猶御立腹止まずして、日夏父子・氏家父子共に切腹、其五人は追放せられ、金森平三郎は大乗寺にて切腹す。宮井喜兵衛一門にて介錯す。小松より大橋又兵衛を以て安房守・山城守方へ御斷り、則又兵衛檢使なしたり。扱十年餘過ぎて、右五人の追放人共被召返、五人の内中村瀨兵

衛は、酒井宮内殿へ立身にて在付き歸參せず。金森平三郎は三百石取りたり。其夜淨住寺へ墓參詣いたし、寺中にて大酒呑み、醉狂して廻番に出會ひ、喧嘩を仕出したりと聞えたり。其頃迄は小將廻番には、必ず番頭一人宛加りて廻りたりとなり。日夏市郎右衛門・有澤太郎左衛門兩人は、陽廣公御部屋住の時分より、番頭を勤めたる者也。とあり。三壺記には、寛永十七年七月盆中の事成るに、所々に躍り夥しく、餘り騒動しけるに、黃門公は小松へ被爲入、光高君は御在江戸也。御留守と申し、御隠居の初め也。若しいか成る申分出來せば、宜しかるまじとて、夜廻を出し躍りを追ちらせと、老中より被申渡。夜廻り衆出で、所々の躍りを追散らす。然る處に、金森平三郎小松へ引越す内なれ共、病氣に付爲養生金澤へ出在之、淨住寺旦那にて參詣する處、夜廻り衆取籠めて咎めけり。其比迄は、御留守中は月夜にも挑灯なれば、金森殊に火は不燈、咎めぬるも道理也。金森はは寺參也。目もあかぬ人々哉と、言葉少に答へければ、夜廻衆、寺參には作法もあらめ、なで付にちやせん髪、上下も着せず。僞至極。足輕共の棒に當り給ふな

と申しければ、金森刀に手を懸け、互に雜言に成りければ、近所の者共出合ひあつかひ、相引きに成りける處、早小松へ聞え、御吟味きびしく成り、夜廻氏家十兵衛・日夏市郎右衛門兩人切腹被仰付、金森平三郎は追放に仰付けられけり。とあり。按するに、金森平三郎を追放と載せたるは過聞なるべし。

○法苑山淨住寺
曹洞宗也。寺記に云ふ。當寺開基花園天皇御世文保二年、大乗寺二世瑩山和尚、加賀國加賀郡山崎村に創立。花園帝勅額を賜ひ、法苑山淨住寺と號し、寺領三百貫の地を寄附し給へり。綸旨・寄進狀等傳來の處、兵亂の頃兵火に罹り悉く焼亡す。庭堂和尚の時大豆田村に移轉し、堂宇再興し、國侯より寺地二千三百歩を寄附せらる。とあり。按するに、日本洞上聯燈錄の瑩山紹瑾禪師傳に、加州淨住。能州光孝(永光)皆請師爲開山之祖。とありて、能登國酒井永光寺に傳來せる元亨三年十月九日に筆記せられし瑩山禪師の置文に、加州淨住寺者、本願素意清淨寄進之僧所間、任素意爲了閑上座。令修練勤行。如今無涯老門徒相承而可令住持興行。是